

たのしい観光地 第37回 中丸謙一郎 (コラムニスト)

乳頭温泉郷 不便という贅沢

一種の不便さを感じる観光地はいつまでも記憶に残る不思議な魅力がある。乳頭温泉郷で考える、観光地の「快適さ」。



乳頭温泉郷には7つの温泉があり、部屋、宿泊タイプなど、それぞれ。詳細は各施設に問い合わせを。

政治資金不正支出問題で辞任に追い込まれた舛添さん(舛添要一元東京都知事)は、すいぶんと記者たちによりこめられていたが、冗長な記者会見のなかで、「わたしも温泉好きですから」と目を輝かせて質問に答えていたシーンが、なぜかいつまでもわたしの記憶のなかに残っている。どうもみなさん、本当に温泉が大好きの方である。わたしはというと、嫌いともではないがそれほど興味はなく、理由を考えると、たしか

に気持ちはいいが、あの「着たり脱いだり」の煩わしさが嫌なのだとわかった。試しに実家の老婆に聞いてみると、「わたしも同じ。お仲間と温泉旅行に行っても、わたしは一回しか入らん」と、どうやらこれは血筋のようだ。そんなわたしでも、長年行きたいと思っていた温泉がある。秋田県の乳頭温泉郷である。最近ではすっかり有名になったが、人里離れた景色と乳白色の露天風呂の風情がなんとも魅力的で、機会があればぜひ行ってみたいと思っていた。

数年前、念願が叶い、乳頭温泉郷の名旅館「鶴の湯」を訪ねた。なにもない殺風景な三畳間、まったく繋がる気配のないスマホ、宿泊者全員が十間の囲炉裏の周囲に座り飯を食う、などの「困惑」に塗られながらもその滞在を堪能、東京に帰ってからも、部屋に置いていたトレーナーの「硫黄臭さ」が強烈で、文字通りの「残り香」をいつまでも感じていた。

元禄時代に開業した「鶴の湯」は、近在の農家の人たちの湯治の場として長く親しまれてきた。地域限定のまさに「秘められた」温泉地だった。明治、大正、戦前。半年間、雪に閉ざされるような豪雪地帯の一角で、長い間、地元の湯治客を癒やし続けてきたが、鶴の湯が急に流行りだしたのは、戦後の昭和21、22年ごろからであるという

「鶴の湯温泉ものがたり」無名舎出版編。近隣の村人に加え、周辺の引き上げ者や復員者などが、どっと押しかけてくるようになった。また、閉じられた空間ではあったが、自炊、相部屋



鶴の湯をはじめとする乳頭温泉郷は、多くの湯治客、観光客で賑わっている。

見知らぬ客との自然発生的な酒盛りなどの「いい感じ」のスタイルが、この頃からできあがってきたという。

その後、昭和30年代後半から高度経済成長に入る昭和40年代にかけて、田沢湖高原一帯の観光開発が急激に進んだ。国民休暇村なども整備され、田沢湖周辺のメジャーな観光地だけではなく、奥まった乳頭温泉郷にも旅行者が少しずつ来はじめた。

だが、全国的なレジャーブームのなか、鶴の湯をはじめとする乳頭温泉郷は苦しい経営を余儀なくされた。というのも、半年間は営業のできない豪雪地帯と

いうことに加え、建物の修理や道路の補修に毎年かなりの費用がかかる。昔から何代も続いた湯治場ゆえ、宿泊料もおいそれと値上げできない。秋田県内でもレジャーブームに乗り遅れまいと、設備投資や団体客の誘致などにやっきになったが、それが叶わなかったことが、後年、「東北屈指の秘湯」として評価されることになった。

一時経営危機にまで陥った「鶴の湯」だが、伝統や素朴な面は残しながら、トイレや電灯、水の管理など、少しずつ改善を加えていった。そのかいあって、平成に入り、ガイドブッ

クやテレビ番組の「一度は訪れてみたい温泉ランキング」のような企画で一位を獲得するほど有名な温泉宿になっていた。

秘湯ブームというのは奥深い。人間は不便を嫌がる。温かい屋根の下での脱ぎ着きえ億劫がる。トイレには極上の清潔さを求めるし、携帯電話の電波の本数2本以下なんてありえないと思っている。だが、秘湯は多くの旅人に愛される。人は不便を味わうことに楽しみを見出す。混浴風呂の気恥ずかしさや、携帯電話の使えない「やることのない」三畳間の時間、趣はあるが殺風景な板場での食事。それは、やがてかけがえない思い出として、我々の脳裏にインプットされていく。

たのしいってなんだ？ 快適ってなんだ？ 乳頭温泉郷は、そんなことを考えさせてくれる観光地である。

中丸謙一郎

(なまかる・けんいちろう)

コラムニスト。1963年生。横浜市出身。「POPEYE」「BRUTUS」で編集者を務めた後、フリー。新聞、雑誌等に昭和の風俗や観光に関するコラムを寄稿。著書に『ロックンロール・ダイエット』(扶桑社文庫)、『車輪の上』(エイ文庫)、『大物講座』(講談社)など。にわか弁当男子。先日、「BOAT HOUSE」のトレーナーを買ったら、全然似合いませんでした。日本民俗学会会員。